

キリスト教の「生命のはじまり」に関する一考察

藤原武男

1. はじめに

クローン技術をはじめとする近年の生命科学の急速な進展は、不妊治療や再生医療などへの応用で人類に恩恵をもたらすと考えられる一方、“人間が人間をデザインしていいのか”、といった重要な倫理的問題を改めて提起した。これまでも中絶や人工授精、体外受精、代理母、精子・卵子バンクといった革新的な生殖医療の倫理的問題は議論されてきたところではあるが、クローン技術が発表された1996年以降、クローン人間が誕生するのでは、との危惧から生殖医療の倫理的問題が再度クローズアップされてきたように思われる。

そもそも生殖医療の進展がなぜ倫理的問題を提起するかといえば、いつの時点で受精卵もしくは胎児が「人間」といえるのか、その定義に関して万人の合意が得られない点に起因する。ある人は精子と卵子が結合した受精卵をもって人間の生命は始まっているととらえるであろう。受精卵が「人間」であれば、それを研究対象として扱うことはできないし、一切の中絶も許されない。しかしながら、直感的には1つの細胞をもって「人間」であることに違和感を覚える人もいるであろう。また日本の法律では22週未満の胎児は母体の外に出た場合に一人で生きのびることができないことから22週以降の墮胎を禁じているが、この線引きは医学の進展に伴い変化すると考えられ、「生」の線引きが時代とともに変わる、というのも納得しにくい。

こうした「生命のはじまり」の定義を考える際、メジャーな宗教、例えばキリスト教の見解が参考になるかもしれない。キリスト教倫理は「生命のはじま

り」に対してどのような根拠でどのような見解を示しているのでしょうか。そしてその見解を現代医学の知見と照らし合わせてどの程度整合性がとれるのでしょうか。こうしたキリスト教倫理からみた「生命のはじまり」を生物学的・医学的に批判的に検証することで、「生命のはじまり」を定義するために不可欠な視点を探るのが本稿の目的である。

2. 生殖・出産に関する聖書の見解

まず、キリスト教の原典である聖書を紐解いてみたい。聖書に「生命のはじまり」に関する直接的言及はない。あるとすれば、神によるアダムとイブの創造であり、彼らの使命として語られた「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ」(創世記1:28)との言葉が生殖や出産に関する言及である。この創世記の聖書の言葉からわかることは、キリスト教において、子孫を増やすことは神の祝福の表れだ、と考えられていたということである。したがって、子どもを産むということは自分が神に祝福されていることを示すものと考えられていた。それは裏を返せば、子どもに恵まれない人は神に祝福されていないことを意味したようである¹⁾。聖書が書かれた時代にはもちろん人工授精もクローン技術もない。しかし、出産に伴う苦悩、例えば不妊の苦しみがそこにはあったのである。聖書の中にも不妊で苦しむ信者の記述が散見される。例えば、次の聖書の記述はヤコブの妻・ラケルの、神に祝福されない者としての不妊の苦悩をよく示している²⁾。

「ラケルは、ヤコブとの間に子供ができないことが分かると、姉をねたむようになり、ヤコブに向かって、「わたしにもぜひ子供を与えてください。与えてくださらなければ、わたしは死にます」と言った。ヤコブは激しく怒って、言った。「わたしが神に代われると言うのか。お前の胎に子供を宿らせないのは神御自身なのだ。」ラケルは、「わたしの召し使いのビルハがいます。彼女のところに入ってください。彼女が子供を産み、わたしがその子を膝の上に迎えれば、彼女によってわたしも子供を持つこ

とができます」と言った。ラケルはヤコブに召し使いビルハを側女として与えたので、ヤコブは彼女のところに入った。」(創世記30:1-4)

(中略)

「しかし、神はラケルも御心に留め、彼女の願いを聞き入れその胎を開かれたので、ラケルは身ごもって男の子を産んだ。そのときラケルは、「神がわたしの恥をすすいでくださった」と言った。彼女は、「主がわたしにもう一人男の子を加えてくださいますように(ヨセフ)」と願っていたので、その子をヨセフと名付けた。」(創世記30:22-24)

このように、子どもを授かるということが完全に神の領域の問題として扱われている。そこにあえて人知を介入させようとするならば、女奴隷に代わりに身ごもってもらう、という発想がすでにあったことは興味深い。今で言う代理母といえよう。この事例をもって聖書では代理母を認めていたと結論付けるわけにはいかないが、聖書においては受胎に関して完全に神の領域と考えられており、また不妊の苦悩への共感も十分に示されていた、ということは今後キリスト教の「生命のはじまり」への見解を考える上で重要な土台となるであろう。

不妊の苦悩同様、望まない妊娠への苦悩も古来から存在したであろう。中絶のための薬草や器具が古代エジプト時代の壁画から発見されていることからいえる。では聖書は、中絶に対して何を語っているのだろうか。直接的な言及は少ないが、例えば、聖書には以下のような記述がある³⁾。

「人々がけんかをして、妊娠している女を打ち、流産させた場合は、その女の主人が要求する賠償を支払わなければならない」(出エジプト記21:22)

つまり、胎児の死は夫婦の損失とみなされておらず、胎児自身の権利は認められていないのである。さらに、姦淫による妊娠に関しては以下のような記述がある。

(138)

「三ヶ月ほどたって、『あなたの嫁マタルは、姦淫をし、しかも姦淫によって身ごもりました』とユダに告げるものがあつたので、ユダは言った。『あの女を引きずり出して、焼き殺してしまえ』」（創世記38：24）

姦淫は当時の社会において死罪である。その意味では、ユダの発言は法に従ったものと考えることができる。注目すべきは、このなかで胎児の生命については全く語られていない、ということである。胎児は、母体と独立の存在として認められていないのである。これまでみてきたものは旧約聖書であるが、新約聖書においては、胎児の生命に関する記述は皆無である。つまり、聖書は胎児の生命に関して、何も語っていないといえる³⁾。

3. 「生命のはじまり」に関する中世から現代までの カトリックの見解

はじめて神学的に胎児の生命を認識し中絶を否定する見解を示したのは古代キリスト教最大の神学者・アウグスティヌスである⁴⁾。彼は、上述の創世記の一節（「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ」（創世記1：28））から、出産がセックスの目的であり、その場合においてのみセックスが許される、と考えた。したがって、中絶はセックスの唯一の目的を阻むが故に罪深い行為と考えたのである。この見解が中世、そして現在にいたるまで影響し、カトリックにおいて中絶に対する批判的見解が形成されていったと考えられている⁵⁾。

次に神学的に整理したのは中世最大のカトリック神学者といわれるトマス・アクィナス⁶⁾である。基本的にはアウグスティヌスを踏襲しているが、具体的に「いつから生命がはじまるのか」について言及した点で注目できる見解を述べている。曰く、「男の胚には受精後40日目に、女の胚には受精後90日目に神が“魂”を吹き込む」と。彼の生きていた時代を考えれば、この日数に明確な根拠があったとは考えられない。むしろ、男性優位の思想を反映させるために男の胚によりはやく魂が吹き込まれると考えたのであろう。そして、中絶はいかなる時期にも罪深いものと見なしたが、とりわけ、胎児が「形をなした」ものと

なっている場合、その罪はいっそう重いと考えていたことは注目に値する。

19世紀半ばから、生殖メカニズムが解明されてくるにつれて、教皇は中絶を公然と批判するようになり、この時期に、カトリックは、胎児の人格性は受精の瞬間に始まるという考えに近づいていったのである。それを現代において明確に示したのが回勅「人間の生命について—産児制限について」(Humane Vitae、1968年)である⁷⁾。これは回勅という拘束力のある形式で提出されている点が重要である。これによりパウロ6世は、いかなる形式の産児制限(コンドームの使用を含む)も受け入れないことを強調し、パウロ2世、現教皇・ベネディクト16世にも引き継がれている。

そして、このバチカンの見解を踏まえて、現在の様々な生殖医療の問題に答える形で出された教書が「生命のはじまりに関する教書——人間の生命のはじまりに対する尊重と生殖過程の尊厳に関する現代のいくつかの疑問に答えて」(1987年)⁸⁾である。この教書に関して特記すべき点は、カトリックが抱えている一流の科学者集団による最先端の生命科学の知見を踏まえたうえで、きっちりカトリックの見解をまとめている点である。プロテスタントや他の教団ではなかなか真似できないことといえよう。それによると、生命のはじまり、つまり倫理学でいう「胚(胎児)の道徳的身分」は「受精の瞬間」である、としている。同書によるその記述を以下に引用する。

「われわれは、人間の生命が初めに現れた瞬間から、そこに一つの人格の存在を見いだすことができる。ヒトの個体(human individual)であるものが人格的存在(human person)でないということがありえるだろうか。……したがって人間の生命は、その存在の最初の瞬間から、すなわち接合子が形成された瞬間から、肉体と精神とからなる全体性を備えた一人の人間として、倫理的に無条件の尊重を要求する。人間は、受胎の瞬間から人間として尊重され、扱われるべきである。そして、その同じ瞬間から人間としての権利、とりわけ無害な人間だれにでも備わっている不可侵の権利が認められなければならない」(p20-21)

つまり、individual、もう“分けられない”存在であるからこそ、受精の時点で人格を有するpersonとみなしてよい、という見解である。同様の考え方は以下の教皇庁からの墮胎に関する教理聖省の宣言⁹⁾にも見られる。

「卵子が受精した瞬間から父親や母親のそれとは異なる一つの新しい生命がはじまる。それは、自分自身の成長を遂げるもう一人の人間の生命である。受精のときにすでに人間となるのでなければ、その後において人間となる機会はありません。この不変かつ明白な事実は現代遺伝学の成果によって裏付けられている。すなわち、現代遺伝学によれば受精の瞬間から、受精卵の中にはその生命体が将来何になるのかというプログラムが組み込まれていることが証明された。それはつまり、受精卵は一人の人間、しかも特定の特徴をすでに備えた一人の個人となるということを意味する。受精のときから人間の生命は冒険を始めるが、それが持つさまざまな偉大な能力は、発揮されるまでに時間がかかるのである。」(p12-13)

このように、カトリックは中世に形作られた「生命のはじまり」の定義を現代科学により解明された“遺伝子による人間の個性”をもって補強しているといえるだろう。つまり、中世においてトマス・アクィナスが受精により生命がはじまると考えたものを、遺伝子という現代科学の発見をもって具体的に受精の瞬間に生命ははじまるとし、その正しさを裏付けていると考えることができる。

4. 生物学的、医学的見地からの批判的考察

では、キリスト教で定義された“受精の瞬間”という「生命のはじまり」は、生物学的、医学的にみても妥当なのであろうか。

まず、受精は生物学的には時間のかかるプロセスとして捉えられており、ある“瞬間”をもって受精がなされた、とは捉えられていない。受精は、精子が

卵子を包む透明帯を通過し、卵子の細胞膜と水平に接触することにより始まる。そして精子が卵子の細胞質内に引き込まれていく。すると精子核を包んでいる核膜が消失し、濃縮状態の核が膨化し始める。第2減数分裂中期¹⁰⁾で休止期にあった卵子は、精子の侵入により成熟分裂を完了し、第2極体¹¹⁾を放出する。卵子の核は雌性前核¹²⁾になり、精子の核は雄性前核¹³⁾に発達する。そしてこれらの前核は卵子の中央部に移動して融合し、互いの染色体が混ざり合い、46個の染色体をもつ接合子の形成をもって受精の完了となる。

このように、ビデオで一時停止ボタンを押したときのような特定の“瞬間”を受精において決めることはできない。精子が卵子に接触した瞬間から前核同士が融合し始める瞬間、そして接合子が形成される瞬間と、実に様々な“瞬間”によって受精は完成するからである。

これまでみてきた「生命のはじまりに関する教書」による見解から類推するならば、接合子の形成が完了した瞬間をもって“受精の瞬間”と捉えるのが最も合理的であるだろう。教書にも「接合子が形成された瞬間から、肉体と精神とからなる全体性を備えた一人の人間として、倫理的に無条件の尊重を要求する。」とある。確かに、そこには将来人間になる可能性の全てが備わっている。生物学的にみても、「墮胎に関する教理聖省の宣言」にあるとおり「現代遺伝学によれば受胎の瞬間から、受精卵の中にはその生命体が将来何になるのかというプログラムが組み込まれていることが証明された。それはつまり、受精卵は一人の人間、しかも特定の特徴をすでに備えた一人の個人となるということの意味する」ということはいえるであろう。

しかしながら、遺伝子によって人間の人格が100%決定されるわけではないことも、現代医学が証明するところである。すなわち、接合子の形成による新しい遺伝子の組み合わせが、直ちに新しい人間・人格の誕生を意味するわけではなく、新しい人間・人格が誕生するまでの“プロセス”が始まった段階にすぎないと考えるべきであろう。その理由の第一に、一卵性双生児同士が完全に同じ人格を形成するわけではないことがあげられる。受精“後”の分裂によりできる一卵性双生児は、接合子の形成をもって魂が吹き込まれ1個の人格の存在

を主張するキリスト教の見解では説明できない。受精卵が“individual-分けられない”存在ゆえにperson(人格)を有するとの根拠は、一卵性双生児には適用できないといえよう。オーストラリアの神学者ノーマン・フォード神父は、原始線条が発達する前の一卵性双生児となりうる受精後14日頃において受精卵の分化は完成されておらず、“分けられない存在”として哲学的に定義された個体(individual)を見出すことはできない、つまり、少なくとも一人の人格(human person)が要求する個別性を有してはいない、受精卵を生命のはじまりとすることについて否定的な見解を示している¹⁴⁾。これに関連して、両生類胎生学者のクリフォード・グローブシュタイン博士や、神学が専門のイエズス会士リチャード・マッコミック神父は、遺伝学的には受精の瞬間に人間が存在しても、二人以上の個人になり得るので受精後14日以前の状態はまだ個人としての人間ではない、従って人格ではなく、単に「前受精卵」でしかない、という主張をしている。つまり、“前受精卵”は「緩やかに結合した細胞群」であり、まだ何人の個人になるか決めかねている状態であるとしている^{15)、16)}。しかし、受精卵は受精卵であり、また14週以降でも双子となることがありうる¹⁷⁾ことから、この議論は科学的でないとの批判もある。

カナダのリージェント大学の生命倫理学教授であるエドウィン・ホイ博士はこれに対し、受精卵が一卵性双生児となる可能性は全ての受精卵に一様に存在するわけではなく、その確率は出産の0.3-0.4%と極めて低いものであること、そして科学者もなぜ受精卵が二つに分かれて一卵性双生児となるのか、その仕組みを解明できていないこと、さらに一卵性双生児の形成には遺伝的要素があることから一卵性双生児となる場合は受精卵に潜在的に2つの生命が宿っているのではないかと反論している¹⁸⁾。しかし、確率が低くても実際に一定の割合で一卵性双生児は存在するわけで、一卵性双生児を例外扱いして「生命のはじまり」を定義するわけにはいかないであろう。また、将来分かれる受精卵に2つの生命が宿しているとした場合、分かれるまでの受精卵は1つの個体でありながら2つの人格を宿していることになり、墮胎に関する教理聖省の宣言にある「受精卵は一人の人間、しかも特定の特徴をすでに備えた一人の個人とな

るということを意味する」故に受精卵を「生命のはじまり」としたことに矛盾が生じる。現代の生物学的視点からは、受精卵をもって直ちに「特定の特徴をすでに備えた一人の個人となるということ」を意味する、と定義することは難しいと考えられる。

また、生命のはじまりに関する教書では、受精の瞬間に「肉体と精神とからなる全体性を備えた一人の人間」、すなわち人格が存在することを主張しているが、胎児の脳神経系の十分な発達もない状態で“精神を備えている”といえるのであろうか。そこに注目し、例えばジョン・ゴールデンリング医師は、真の意味での「人格」は「脳の誕生」、つまり機能している脳と考えられる“活動性のある脳 (active brain)”によって定義できると主張している¹⁹⁾。そしてより具体的に、胎児の脳が機能し始めると考えられる妊娠8週目から人間としての生命が始まる、と主張している。さらにオタゴ大学解剖学教授のガレス・ジョーンズ博士は、脳の誕生の定義についてこれまでの文献を整理し、受精後12日から妊娠20週までの幅があるとしている²⁰⁾。こうした幅が生じるのは、脳死の定義を脳の誕生に当てはめて考えた場合に、脳死の定義が幅を持つためと考えられる。そして、本当に脳が機能していることをもって脳の誕生というのであれば、胎児の脳が脳波を示す妊娠24-28週（妊娠5-6ヶ月）とするのが妥当だ、と主張している。これに対し、アメリカカトリック大学の医療倫理学教授であるダイアンヌ・アーヴィング博士は、周りの世界を理解できる能力や自我意識等が人間の「人格」の理由であれば、新生児、幼児、アルコール・麻薬中毒患者、精神病患者、昏睡状態にある病人等も「人格」ではないことになりうる、と反論している²¹⁾。たしかに、脳神経系の発達は人格の形成に大きな影響を与える要素ではあるであろう。しかし、脳神経系の“完成”がなければその個体の人格がはじまっているとはいえない、との考え方は、一般的には生命がはじまっていると考えられる新生児の人格をも否定しかねない。この議論で混乱しているのは“人格”の発生を瞬間的に捉えようとしている点であろう。つまり、人格の発生そのものが時間のかかる“プロセス”であり、ある瞬間をもって定義できる性質のものではないのではないだろうか。確かに外界を認識でき自我意識

が生じるという“人格”があるといえるためには脳神経系の発達は重要であるが、それは人格の形成されるプロセスがスタートしたにすぎない。人格の完成は生後も続くのであり、脳全体を統合するシステムが“完成”しなければ人格が生じないというのは科学的合理性を欠くものと考えられる。それを踏まえたうえで、「生命のはじまり」を議論する際に、人格という人間の精神性を含む要素が顕在化されるために必要な脳神経系が発生的にいつ形成されはじめるのか、という点に注意を払うべきではあるだろう。すなわち、妊娠8週目以降は胎児の脳が機能し始めていることから、この時期以降、人間生命の人格の形成プロセスは“始まっている”と考えていいのではないだろうか。

別の角度からも受精卵の道徳的身分について考察してみたい。それは、受精卵の着床から発分化の過程で正常に育つことが出来なかった場合の扱いである。例えば胞状奇胎という妊娠異常があるが、これは胎盤絨毛が水腫性に膨大し、嚢胞化した病変である。その原因は、受精卵の染色体異常によるものと考えられている。つまり、遺伝子のない卵子に精子が受精し、父方由来の雄性前核しかないまま2倍体化することによって、46個の染色体をもつ妊卵となった場合に発生する病変である。胞状奇胎は絨毛癌になりやすいため掻爬除去術を行わなければならないが、受精卵はすでに人間であるとする立場では、これは許されない行為となってしまう。この場合、キリスト教倫理を応用すると、父方由来と母方由来の配偶子が混ざり合うことによって形成された接合子でなければ生命とはいえない、ゆえに胞状奇胎の掻爬は許される、という反論も考えられる。しかし、クローン技術によって生まれた羊・ドリーは配偶子が混ざり合うことなく生まれている。キリスト教倫理でもドリーを生命ではない、と断じることが出来ないであろう。あるいは、キリスト教倫理に従いながらも柔軟に現実に対応する立場として、“胞状奇胎であっても人格はあり、人間として扱われるべきであるが、母体の生命を優先すべき特別な状況であるので、掻爬、すなわち中絶は許される”と考える者もいるであろう。また、“胞状奇胎の場合、すでに胎児は死んでいると考えてよい、したがって掻爬、すなわち中絶は許される”と考えることもできる。逆に言えば、非常にクリアな定義と思われた

「受精の瞬間」というキリスト教の「生命のはじまり」の定義は現実に対応しようとした場合に様々な解釈によって変容しうる定義なのかもしれない。なぜ変容してしまうかといえば、現実には「生命」がはじまるのはある瞬間をもってではなく、時間をかけて不可逆なプロセスとして始まっているからであろう。つまり、生命が肉体と精神を伴う形で同一性個別性のある「生」を開始するためには様々なステップが必要であり、そのステップを全てを乗り越えてはじめて個別の「生」を開始する、と考えることはできないだろうか。上記の胞状奇胎を例にすれば、受精をして「生」のプロセスは開始されたものの、母方由来の配偶子との融合というプロセスを経ることができなかったために、「生」を開始することができなかった、故に胞状奇胎に人格はない、と考えることができる。キリスト教による受精の瞬間を「生命のはじまり」とする定義は、より厳密には「生命のはじまりのプロセスの始まり」なのであろう。受精の瞬間をもって「生命のはじまりのプロセスの終わり」でもあると見做してしまったことに現実との乖離が生じていると考えられる。

さらに見方を変えて、遺伝子の組み合わせのみで人間の特徴が決定されるわけではない、という点を掘り下げてみたい。近年の研究から、妊娠中の環境によって、遺伝子の発現型が変わるということがわかってきた²²⁾。例えば、寒い地域で生まれた場合、汗腺があまり発達しないため生後あまり汗をかかないということが報告されている。同じ遺伝子でも、妊娠中の環境により発現する遺伝子が異なってくるのである。これはもちろん病気に関する遺伝子でも同じで、例えば子宮内で栄養が少ないという環境に暴露された場合、その環境で生き延びることができるようにプログラミングがなされ、出生後も引き続き予想される低栄養状態に備えるが、実際には出生後は子宮内時での予測以上に栄養摂取可能な環境であった場合、すでにプログラムされた遺伝子型の発現が現在の環境に適応することが出来ないため、中心性肥満や2型糖尿病（それぞれ説明が必要？）を発症しやすくなることが知られている²³⁾。すなわち、遺伝子のみが人間の特徴や人格を決定するものではないと考えられる。もちろん新たな遺伝子の組み合わせは新しい生命において極めて重要な要素である。しかし、それだけ

でなく、与えられた遺伝子が環境の影響も受けながら十全に発現し、「特定の特徴をすでに備えた一人の個人」と考えられるときにこそ、胎児の道徳的身分は存在するのではないだろうか。こう考えたときに、「生命のはじまり」はやはり瞬間ではなく、時間的経過を伴うプロセスと捉えざるをえない。そして「生」のプロセスにおいて、環境の影響を大きくうける臨界期（妊娠第2～12週）は「生」のプロセスに大きく関与している時期と考えられるのではないだろうか。

5. プロセスとしての「生」のはじまり

以上の考察から、「生命のはじまり」は瞬間をもって定義できるものではなく、プロセスで捉えるべき問題であることが提起された。神学者でもあるモンテリオール大学倫理学教授のブルジョ博士は創価学会池田名誉会長との対談の中で、キリスト教倫理による生命の誕生の考え方を紹介する形で、「実際に『この瞬間から人間の生命が始まる』とか『人間であると認める』という瞬間を特定することは難しいと私は考えます。むしろ少しずつ生命体が複雑になって、次第に人間になっていくと考えます」²⁴⁾と、生命のはじまりをプロセスとしてみていくべきことを述べている。では、その「生命のはじまり」のプロセスはいつ始まり、いつ終わるのだろうか。この定義は重要である。なぜなら、「生命のはじまり」のプロセスが終わったときに胎児の道徳的身分は発生すると考えられるからである。そしてこのプロセスが始まる前の段階は生命とは考えられないとあっていいであろう。プロセスが経過中の受精卵（胎児）の道徳的身分については微妙である。前述のように胞状奇胎など「生命のはじまり」の方向から逸れていく場合もある。体外受精により受精した受精卵で子宮に戻されなかった受精卵は子宮に戻されない限り「生命のはじまり」の方向に進んではいけない。この様にケース・バイ・ケースともいえ、道徳的身分はまだ完全には発生していないと考えられるが、“前”道徳的身分として、尊重して扱われるべきもの、とも考えることができる。

「生命のはじまり」のプロセスの始まりは受精のプロセスの始まり、つまり精子が卵子に接触した瞬間、と考えることもできれば、受精の完了、つまり接

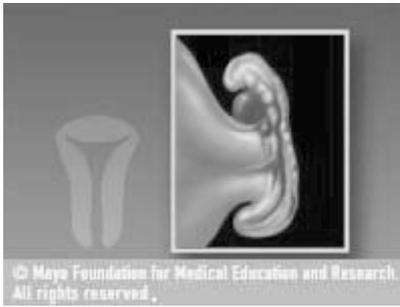
合子が形成された瞬間、と考えることもできる。ここでは、“前” 道徳的身分が発生するという事は、道徳的身分になりうる過程がスタートする、ということであり、それは精子が卵子に接触したときから始まると考えられることから、精子が卵子に接触した瞬間から「生命のはじまり」のプロセスは始まるのではないかと考えられる。

問題なのは「生命のはじまり」のプロセスの終わりである。ここで、キリスト教の原典・聖書に再度立ち返って「生命のはじまり」について考えてみたい。そもそも、キリスト教では、神は人間を自分の似姿として創造した（「神にかたどって創造された」（創世記1・27））とある。ならば、生殖による新しい「生命のはじまり」もそこになぞらえて考えることはできないだろうか。トマス・アクィナスは生殖による新しい生命の誕生を、神によって“魂”が吹き込まれたとしたが、それを神は人間を自分の似姿として創造した、という創造論の原点に立ち返って解釈することはできないだろうか。その論拠として、カトリックではないが、創造論の新しい解釈であるインテリジェント・デザイン²⁵⁾があげられる。これは、進化論を一部認めつつも、「その過程は（神のごとき）偉大な知性の操作によるものである」として宗教色を薄めつつ、“偉大な知性”という名の神による創造を主張するものである。生命の創造においても、インテリジェント・デザインを主張する創造科学者は、極めて精妙な生物の細胞や器官のしくみを例に挙げて、「複雑な細胞からなる生体組織が進化、自然淘汰などによってひとりでのできあがったとは考えられない。従って創造に際しては“偉大な知性”によるデザインが必要であった」と主張している。もちろんこの主張はカトリックのものではないのだが、「神による創造」をキリスト教の信者ではない人々にもわかりやすく説いているとはいえよう。この解釈を利用すれば、神が自分の似姿として創った人間は、生殖による新たな生命の誕生においても神の姿に似ているところにまで「偉大な知性」により創造されていなければならないと考えてもいいのではないだろうか。

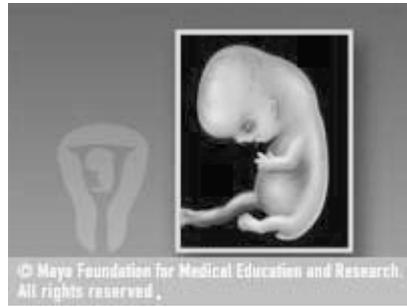
しかしながら、胎児の発生を見たときに、“人間の姿をしてきた”という発達過程をどの時点で認めるか、という問題が生じる。形態学的に捉えることもで

きるし、機能的にも定義できるからである。機能的にみて“人間の姿をしている”という場合、体外で一人で生きることができるだけの機能がある、ということであろう。そう考えた場合、胎児は子宮内にいるため、そもそも呼吸・循環系の仕組みが体外で生きる場合と全く異なる。したがって、胎児である以上機能的に“人間の姿をしている”とは考えられないことになる。以上から、“人間の姿をしてきた”という発達過程は形態学的に捉えざるをえない。形態学的に見た場合、“人間の姿をしてきた”という表現を神がアダムとイブという別の性を創り出したことを踏まえて「頭部・体部・四肢・生殖器が区別できるとき」と定義すると、頭部・体部・四肢は第9週でほぼ区別がつくが、生殖器に関しては11週において外観からも性別がはっきりしてくることから、第9週から第11週において“人間の姿をしてきた”といえるのではないかと考えられる（図参照）。さらに、この時期は臨界期とも一致し、この時期以降の胎児環境の変化で胎児の遺伝子発現が大きく変化することは考えにくい。つまり、「生命のはじまり」のはじまりのプロセスは、キリスト教の原典に立ち返って考えると妊娠11週をもって一区切りがつくと考えられるのではないだろうか。

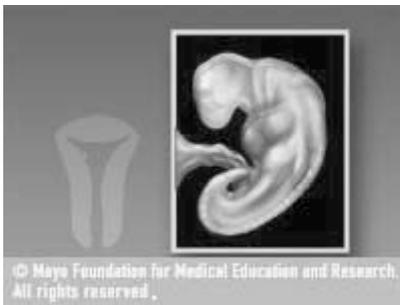
以上、キリスト教の「生命のはじまり」を生物学的・医学的見地から批判的に考察することで、生命のはじまりはプロセスとして捉えるべきことがわかった。また、聖書において神が人間を似姿になぞらえて創造した、というプロセスを生殖による人間生命の誕生になぞらえた場合に、「生」のはじまりのプロセスは受精（精子と卵子の接触）から妊娠11週までと考えられた。神学者でもない筆者がこのような考察を述べるのは赤面の至りであるが、むしろそれにより柔軟かつ大胆に考察できた面もあると考えている。キリスト教を題材に「生命のはじまり」を考察することによって「生命のはじまり」をプロセスとして捉えなければならないことが明確に浮かび上がっていれば本稿の目的は達せられているであろう。



妊娠 5 週 心拍開始



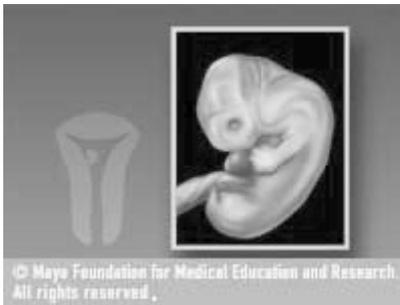
妊娠 9 週 胎動の開始



妊娠 6 週 神経管の閉鎖



妊娠10週 脳細胞の増殖



妊娠 7 週 臍帯の形成



妊娠11週 外陰部の形態化

図 1. 妊娠初期の胎児の形態と機能の発達 (Mayo Clinic ホームページ²⁶⁾ より抜粋)

(150)

[註]

- 1) 小原克博「第2章 人工授精・体外受精」神田健次編『生と死』(講座 現代キリスト教倫理 第1巻)、日本基督教団出版局(1999年)。
- 2) 小原克博「組織神学1「現代におけるキリスト教倫理の諸問題」生命倫理の諸問題(1) [http://theology.doshisha.ac.jp:8008/kkohara/lecture.nsf/504ca249c786e20f85256284006da7ab/968dc1501e3d5b8549256fb5004e89a1/\\$FILE/resume02.pdf](http://theology.doshisha.ac.jp:8008/kkohara/lecture.nsf/504ca249c786e20f85256284006da7ab/968dc1501e3d5b8549256fb5004e89a1/$FILE/resume02.pdf) (2007年5月アクセス)。
- 3) 小原克博「組織神学1「現代におけるキリスト教倫理の諸問題」生命倫理の諸問題(3) [http://theology.doshisha.ac.jp:8008/kkohara/lecture.nsf/504ca249c786e20f85256284006da7ab/968dc1501e3d5b8549256fb5004e89a1/\\$FILE/resume04.pdf](http://theology.doshisha.ac.jp:8008/kkohara/lecture.nsf/504ca249c786e20f85256284006da7ab/968dc1501e3d5b8549256fb5004e89a1/$FILE/resume04.pdf) (2007年5月アクセス)。
- 4) 小原克博「同性愛、中絶、不倫……米キリスト教会と『多様な性』」、『論座』(朝日新聞社)2001年6月号。
- 5) 同書。
- 6) 小原克博「組織神学1「現代におけるキリスト教倫理の諸問題」生命倫理の諸問題(3)。
- 7) 教皇パウロ六世回勅『フマーネ・ヴィテー適正な産児の調整について』、1968年。
- 8) 教皇庁教理省(訳:ホアン・マシア/馬場真光)「生命のはじまりに関する教書 人間の生命のはじまりに対する尊重と生殖過程の尊厳に関する現代のいくつかの疑問に答えて」東京;カトリック中央協議会(1987)。
- 9) 教皇庁教理聖省「墮胎に関する教理聖省の宣言」、東京;カトリック中央協議会(1974年)。
- 10) 減数分裂とは、細胞が配偶子を形成する際に行われ、生じた娘細胞では染色体数が分裂前の細胞の半分になる。染色体の複製の後に相同染色体が対合し、二回連続して細胞分裂が起こるため、最初の分裂を第一分裂、次の分裂を第二分裂という。第二減数分裂中期とは2回目の分裂が停止している状態をさす。
- 11) 卵細胞の減数分裂は最終的に1個だけが必要な卵細胞となるために特徴的なシステムを有する。それは、核が2個に分裂しても、それを囲む細胞質は2つに分かれず、どちらか一方の核が、卵細胞の細胞質からはじき出されるように排除される点である。はじき出された核を極体と呼ぶが、減数分裂が2回あるため、第1分裂、第2分裂で放出された極体をそれぞれを第1極体、第2極体と呼ぶ。
- 12) 母親の遺伝情報を保持する卵子由来の核のこと。
- 13) 父親の遺伝情報を保持する精子由来の核のこと。
- 14) Ford, N. M. 「When Did I Begin? : Conception of the Human Individual in History, Philosophy」New York : Cambridge University Press, 1988.
- 15) Grobstein, C. “The early development of human embryos”, Journal of Medicine and Philosophy (1985), 10 : 213-236.

- 16) McCormick, R. “Who or what is the preembryo?”, Kennedy Institute of Ethics Journal, (1991), 1 : 1-15.
- 17) Ronan O’Rahilly and Fabiola Muller, Human Embryology & Teratology New York : John wiley & sons, Inc., 1994.
- 18) Hui, E.C. 「At the Beginning of Life: Dilemmas in Theological Bioethics」 InterVarsity Press, Downers Grove, IL. 2002.
- 19) Goldenring, J. “The brain-life theory : Towards a consistent biological definition of humanness”, Journal of Medical Ethics (1985), 11 : 198-120
- 20) Jones, D.G. “Brain birth and personal identity”, Journal of Medical Ethics (1989), 15 : 4 : 173-178
- 21) Irving, D. N. “The Immediate Product of Human Cloning is a Human Being: claims to the contrary are scientifically wrong” lifeissues.net (http://lifeissues.net/writers/irv/irv_09cloninghuman1.html) (2007年9月アクセス。)
- 22) Gluckman, P & Hanson, M. The Fatal Matrix : Evolution, Development, and Disease Cambridge : Cambridge University Press, 2005.
- 23) Kuh D, Ben-Shlomo Y. A Life Course Approach to Chronic Disease Epidemiology; Tracing the Origins of ill-health from Early to Adult Life. London: Oxford University Press; 1997.
- 24) ルネ・シマー、ギー・ブルジョ、池田大作「健康と人生 生老病死を語る」潮出版社、2000年。
- 25) フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』参照。
- 26) Fetal development : What happens during the first trimester? MayoClinic.com. <http://www.mayoclinic.com/health/prenatal-care/PR00112> (2007年9月アクセス)。

Thoughts on Christianity's Definition of the Beginning of Life

Takeo Fujiwara

In order to discuss the concept of the beginning of life in conjunction with ethical issues related to assisted reproductive technologies, it would be beneficial to critically review Christianity's definition of the beginning of life. In the Bible, there is no description of abortion. Historically, in the Middle Ages, Thomas Aquinas considered that God inspired a soul into the fetus 40 days after fertilization for males and 90 days after for females. Since then, abortion has been considered a sin for Christians. In the middle of the nineteenth century, the Catholic Church concluded that the beginning of life was at the precise moment of fertilization. Pope Paolo VI addressed this and restricted the use of assisted reproductive technologies as encyclical (*Humane Vitae*, 1968). However, from a biological point of view, it is hard to define the "moment" of fertilization. It can be the moment when sperm attaches to the egg, or it can be the moment when the male pronucleus combines with the female pronucleus. The beginning of life of monozygotic twins is unexplainable by the definition of Christianity. In order to be consistent with biological evidence, the beginning of life needs to be considered as a "process". According to the Bible, God created human being in the image of himself. Therefore, the process of the beginning of life might be considered as the process from the very first moment of fertilization (i.e. when sperm attaches to the egg), to the time when the fetus looks like a human being, which would be the eleventh gestational week.